



# ヴァンゼー会議記念館

## ヴァンゼー会議

1942年1月20日正午、治安警察・親衛隊保安部長官（Head of the Security Police and Security Service SD）ラインハルト・ハイドリヒ（Reinhard Heydrich）の招集に応じてナチス親衛隊（SS）、国家社会主義労働者党（NSDAP）、ならびに各省庁の代表者が集まり、ゲストハウスのダイニングルームにおいておよそ90分間に渡る会議が開催された。議題は「ユダヤ人問題の最終解決」であった。

ハイドリヒ（Heydrich）の目論見は、移送作戦における彼の主導権を認知させ、さらに主要な省庁ならびに党役職をヨーロッパユダヤ人殺戮準備に巻き込むことにあった。同時に、ポーランドおよび「バルト三国」における非軍事ドイツ占領行政の紛争も現地のナチス親衛隊（SS）指導者によって解決されるべき問題とした。

この会議は、「ユダヤ人問題の解決」における管轄領域を巡る各政府機関どうしの争いを、1941年中にはナチス親衛隊（SS）が制したことを裏付けるものであった。会議の参加者は各々の利害関係に基づいて様々な提案を出し、あるいは異議を唱えたが、全体的には協力体制を敷くという立場をとった。こうしてドイツ国家機構で指導者的立場にあった者たちは、秘密の共有者、そして共犯者となっていったのである。

### 会議議事録

秘密国家警察ユダヤ人問題担当部署責任者（Director of Section IV B 4: Jewish Affairs and Expulsions）、アドルフ・アイヒマン（Adolf Eichmann）はこの会議の成果を議事録にまとめた。これによるとハイドリヒ（Heydrich）は会議参加者に、ヒットラーの「先だつての許可」に従い今後全てのヨーロッパユダヤ人を東ヨーロッパへ移送すると発表した。

彼はさらに、「ユダヤ人問題の最終解決の処理における所轄」が地理的境界を無視して彼の元にあることを強調した。問題となったのは、いわゆる「混血者」（両親あるいは祖父母の一部がキリスト教徒およびユダヤ教徒である者）ならびに「異種族間の結婚」におけるユダヤ人配偶者を移送対象者に加えるかどうかという点であった。

移送命令をこの条件に該当する者にまで拡大するという、ハイドリヒ（Heydrich）の奇襲攻撃的試みは、次官ヴィルヘルム・シュトゥッカー（Wilhelm Stuckart）を代表者として会議に参加していた内務省の権限を侵害するものであった。

この場ではハイドリヒ（Heydrich）の提案は意見の一致を得ることができず、この問題の解決は今後の会議に延期されたためアイヒマン（Eichmann）はこの提案に対し極端にページを割く結果となった：

会議議事録が、参加者名簿1ページ半と統計的なリスト1ページを含めてタイプライター打ち15ページのみであるのに、「混血者」およびユダヤ人の配偶者の移送に関するこの提案の記

述がその内4ページにも渡っている。この急進的な提案は将来的に実現を果たすためにも記録に残される必要があったのである。

この議事録は詳細な発言記録ではなく、会議の結果を記録したものであるため、会議の実際の流れやその場の空気についてはそれとなくしか窺い知ることができない。アドルフ・アイヒマン (Adolf Eichmann) は1960/61年エルサレムにおいて、彼自身の裁判との関連で、ヴァンゼー会議についての事細かな尋問を受けた。アイヒマン (Eichmann) はそこで、各省庁の代表者もまたユダヤ人の殺害を直接的に、かつ一般的な同意の下に口にしていたことを強調した。

彼はハイドリヒ (Heydrich) が満足するまで何度も議事録を書き直さなければならなかったと語っている。議事録の文章には実際に使われた表現をあまり露骨に再現してはならなかったが、しかし一方で次官達を秘密の共有者、共犯者として囲い込むものである必要があった。アイヒマン (Eichmann) は、彼はハイドリヒ (Heydrich) の準備担当部署が必要とする情報を供給しなければならなかったと証言している。その内の一つが「ヨーロッパユダヤ人問題の最終解決過程」において「対象」となる「およそ1,100万人のユダヤ人」のヨーロッパ内での分布とその数の一覧表であった。(議事録6ページ目)

1941年8月ドイツ系ユダヤ人全国代表部 (RV) に、ユダヤ人人口の一覧表を、各国の絶対数と総人口に対する比率に、「ユダヤ人」の概念規定およびユダヤ人の法的地位についての記載を付けて作成せよとの指令が下った。

この指令に対し、ドイツ系ユダヤ人全国代表部 (RV) は種々の出版物、雑誌ならびに新聞の切り抜きに基づいて迅速に以下のような説明を行った：「これらの数値は可能な限り公的文書から引用しているが、その他の場合は基本的に信仰上のユダヤ人に関して見積もっているため、最小値を表すものである。」アイヒマン (Eichmann) によって作成された一覧表と比較するといくつかの有益な誤差が見られる。

1941年夏のガリチア地方またはベッサラビアをめぐる領土拡大に伴って、アイヒマン (Eichmann) は総督府 (General Government) およびルーマニアの数値を上方修正した。ドイツ系ユダヤ人全国代表部 (RV) によるソ連のユダヤ人人口302万人との記載を、アイヒマン (Eichmann) は(あるいはプロパガンダ的理由から) 500万人と大幅に引き上げた。オランダについてはドイツ系ユダヤ人全国代表部 (RV) の135,000からかなり正確な160,800と修正した。エストニアに関しては何も記載が無かったが、アイヒマン (Eichmann) による一覧表ではエストニアは「ユダヤ人無し」となっている。逃亡できなかった全てのエストニアのユダヤ人は既に特別行動部隊A (Special Unit A) の虐殺作戦の犠牲となっていた。

フランスの数値にはアイヒマン (Eichmann) は明らかに北アフリカのフランス領内のユダヤ人も加算していた。ヴァンゼー会議議事録上に記載されたこの一覧表は、ヨーロッパユダヤ人に対する絶滅の脅威であると言える。ヨーロッパユダヤ人に対する現実的な脅威は、1942年1月20日夜の前線推移および参戦国を示す地図からも認識される。この地図はポツダム軍事史研究所の協力を得て、国防軍最高司令部参謀本部 (High Command of the Wehrmacht) の地図をもとに作成された。そこには東および南東ヨーロッパにおけるユダヤ人の生活の中心部がドイツ占領下にあったか、あるいはヒットラーの同盟政権によって支配されていたことが示されている。

アイヒマン (Eichmann) は一覧表のユダヤ人人口を、国防軍の占領国別に区別する一方で、さらに今後ドイツ支配下に入るべき同盟国別および中立国別にも区別した。アイヒマン (Eichmann) の一覧表からは、ナチス執行部が1940年のイギリス侵略失敗ならびに1941/42年冬のロシアにおける電撃作戦失敗後の戦局の変化にもかかわらず、近い将来全ヨーロッパを支配するという前提であったことが窺える。

## ハイドリヒ (Heydrich) への権限付与

会議議事録から、1941年6月以来既に実行されていた大量殺戮を全てのヨーロッパユダヤ人を対象とする組織的な集団虐殺に拡大することは、上層部では会議の会期以前に決定されていたと推測できる。1941年6月22日のソ連奇襲攻撃以来、国家保安本部 (Reich Security Main Office - RSHA) の特別行動部隊 (Einsatzgruppe) は現地のユダヤ人殺害を開始している。この行動とさらに大規模な計画のためにハイドリヒ (Heydrich) は、親衛隊帝国指導者 (Reichsführer-SS) ハインリヒ・ヒムラー (Heinrich Himmler) による委任よりもさらに効力のある権限委任状を必要とした。1941年7月31日夜、ハイドリヒ (Heydrich) はヘルマン・ゲーリング (Hermann Göring) に国家保安本部 (RSHA) 内で作成した公文書を提示し、署名を求めた。

ゲーリング (Göring) は1939年1月に既にハイドリヒ (Heydrich) を強制国外移住の責任者に任命していた。ナチスで第2位の地位にあったゲーリング (Göring) はアドルフ・ヒットラー (Adolf Hitler) から広範囲に及ぶ全権を付与されていた。あらゆる反ユダヤ主義措置の調整もその内の一つである。ゲーリング (Göring) の署名によってハイドリヒ (Heydrich) に、「ヨーロッパ内のドイツ影響地域におけるユダヤ人問題の全体解決」を「時局」を鑑みて準備する権限が与えられた。ハイドリヒ (Heydrich) は半年後、「ユダヤ人問題の全体解決」という概念が集団虐殺という意味合いを帯びて過激化してきた後にこの権限を行使した。

この文書は、ナチス親衛隊内部およびその他の政府機関に対して、ハイドリヒ (Heydrich) の「ユダヤ人問題の最終解決」における指導者的役割を正式に認めるものでもあった。1941年11月29日付の回状により会議に招待された全ての参加者は、この権限付与状の複写を添付文書として受け取った。ヴァンゼー会議から5日後、ハイドリヒ (Heydrich) は付与状の複写をさらに、地方の治安警察 (Sipo) の指導者、親衛隊保安部 (SD)、特別行動部隊 (Special Unit)、ならびにナチス人事局 (Personal Main Office) にも送付した。その送り状の最後には、次のような表現でヴァンゼー会議が開催されたことが示唆されている：「準備作業は開始された」

1942年1月末、アドルフ・アイヒマン (Adolf Eichmann) は該当する全てのドイツ国内の役所・官庁に、1941年10月に既に開始されていたユダヤ人の移送を引き続き実施するよう速達で指示した。ここで彼は「最終解決の開始」を明言している。アイヒマン (Eichmann) は移送の対象者を詳細にリストアップし、1935年制定のドイツ帝国公民法第1号通達に従って、差し当たり移送対象から除外される者を挙げた。ハイドリヒ (Heydrich) は彼が目標とした移送対象者の拡大については、この時点では敢行できなかった。

このアイヒマン (Eichmann) のヴァンゼー会議での協議結果に基づく通達により、全てのヨーロッパユダヤ人の組織的移送の準備が開始された。続く二つのアイヒマン (Eichmann) 主催の会議において、各省庁の「ユダヤ人問題担当官」が1942年3月6日および1942年10月27日、不妊手術による「混血問題の解決」ならびに「異種族間結婚」に対する法手続き上の強制離婚要求について話し合いを行った。

終戦までヒットラー (Hitler) は根本的な決定を下さなかったため、当初計画されていた極端に過激な措置は帝国領内では当面は実行されなかった。このような非ユダヤ人親族に対する配慮は占領国ではなされず、ヒムラー (Himmler) は個人的に、占領国においてユダヤ人の定義に関して制限をつけることを一切差し控えた。ただし、戦争末期頃には帝国領内でも「異種族間結婚の配偶者」もついには移送されることとなった。

## 会議参加者

会議参加者の組織内での所属およびその階級を歴史上の会議室に展示した組織チャートに示している。このチャートから、会議後に作成され、文中で「次官会議」が取り沙汰された文書がこの会議の特質を正確に表していることが分かる。次官達は政府上層部で先立って決定された事柄を実行に移していった。ヴァンゼー会議においてヨーロッパユダヤ人の殺戮が決定されたと表現するならば、それは正しくない。

しかしながら、この会議は、集団虐殺のほぼ全てのヨーロッパ地域への拡大に不可欠な調整作業に寄与するものであったため、歴史的には重要な意味を持つ。つまり、この会議を契機にドイツ国家機構全体が、役割分担して組織的に進める集団虐殺計画へ関与することになっていったのである。会議参加者15名はナチス政権のエリート職に就く者達であった。彼らの経歴は、その多くが大卒者であり、またスピード出世していったことを物語っている。さらに15名のうち8名は博士号取得者であった。彼らの多くは良家の出であり、熱心なナチス信奉者もいれば、どちらかといえば日和見主義的に入党した者もいた。平均年齢は43歳以下と非常に若かった。

しばしばこれらの会議参加者達は戦後どうなったのかという疑問が投げかけられる：3分の1は終戦時には既に死亡していたか、あるいは戦後間もなく死亡した。ラインハルト・ハイドリヒ（Reinhard Heydrich）は会議の数ヶ月後、チェコの抵抗勢力によって暗殺された。ルドルフ・ランゲ（Rudolf Lange）ならびにアルフレッド・マイヤー（Alfred Meyer）はそれぞれ1945年2月あるいは5月に自殺。

ローラント・フライスラー（Roland Freisler）は1945年2月、自身が長官を務めていた「人民法廷」の地下室で空襲に遭い死亡。外務省のマルティン・ルター（Martin Luther）は1943年の外務大臣に対する陰謀が原因で失脚し、裁判準備のためザクセンハウゼンの強制収容所に送られた。1945年春、拘留がもとでベルリンの病院で死亡。

おそらくこの事件のために、計30部の議事録のうち会議後にルター（Luther）に送付された第16番目が我々の手元に渡ることとなったと推測される。彼に対する裁判の準備のため、これらの文書はベルリン中心部に位置する外務省内の彼の執務室から押収された。その後文書は市周辺部のベルリン・リヒターフェルデの建物群内で保管され、終戦直前に行われた組織的な文書破棄を免れた。1947年アメリカ人原告団長のチームが、指導的立場にあった省庁官僚に対するニュルンベルク裁判の準備中に、「ユダヤ人問題の最終解決」と題されたこの両文書をルター（Luther）の執務室から発見した。

会議参加者のさらなる3分の1は戦後早い時期に死亡している。ヴィルヘルム・クリツィンガー（Wilhelm Kritzinger）は1947年、病気のため連合軍による拘留から解放されてすぐに死亡した。彼はニュルンベルクで開かれた「ヴィルヘルム通り裁判」の準備において、発見されたばかりの議事録に基づき、ヴァンゼー会議への参加に関して取り調べを受けた。彼は、後のアイヒマン（Eichmann）同様に、議事録の信憑性と会議への参加を認めている。ユダヤ人の殺戮を犯罪と認め、遺憾に思うと証言した。1951年初頭エリック・ノイマン（Erich Neumann）も死亡した。

エーバーハート・シェーンガルト（Eberhard Schöngarth）はイギリス軍事裁判所の判決に基づき、1946年絞首刑となった。ガリチアでのユダヤ人殺害への関与のためではなく、彼が個人的に命令を下した戦時捕虜の銃殺に対する判決であった。ヨーゼフ・ビューラー

（Josef Bühler）は1948年にクラカウで死刑判決を受けた。アドルフ・アイヒマン（Adolf Eichmann）もまた1962年にエルサレムにて絞首刑となった。

会議参加者の内残りの3分の1は既に1940年代の終わり頃には部分的に、恵まれた戦後生活への移行を果たしている。ゲハルト・クロプファー（Gerhard Klopfer）とゲオルク・ライプブランド（Georg Leibbrandt）は1949年に拘留から解放された。1962年にはクロプファー（Klopfer）に対するヴァンゼー会議への参加に関する捜査手続きは打ち切れ、ライプブランド（Leibbrandt）に対する同案件での予備捜査も1950年には中止されていた。ドイツ司法当局は彼らに対し個人的責任を立証することは不可能であるとした。よって彼らは、多くのいわゆる黒幕達同様、無罪となったのである。クロプファー（Klopfer）は支障なく1987年まで、ライプブランド（Leibbrandt）は1982年まで生き、両者共に80歳以上であった。

オットー・ホフマン（Otto Hofmann）は親衛隊人種・植民本部（SS-Race and Settlement Main Office）に対するニュルンベルク裁判において懲役25年を言い渡された。しかしながら他の多くの者達同様に恩赦を与えられ、1954年にランズベルグ・アム・レヒにあるアメリカ合衆国の戦犯刑務所を出所した。ホフマン（Hofmann）はその後1982年までヴェルテンベルグにて商社に勤務し84歳まで生きた。ヴィルヘルム・シュトゥッカー（Wilhelm Stuckart）は1949年、3年10カ月の刑がそれまでの拘留期間と相殺されたため、ヴィルヘルム通り裁判後に出所した。その後1953年51歳の時に自動車事故で死亡した。

秘密国家警察長官（Head of the Gestapo）ハインリヒ・ミュラー（Heinrich Müller）の行方は未だに分かっていない。プリンツ・アルブレヒト邸が爆撃された後、彼は公務を一時的にヴァンゼー・ヴィラに移し、1945年4月末にはまだ総統司令部で目撃されている。1945年5月1日以来、彼の消息は不明である。南米あるいはアメリカ合衆国に逃亡したという憶測の真相は明らかにされなかった。